昨年から販売を始めた県育成品種「紅鶴」の前で、今年も家族そろってリンゴの旬を迎える木内修一さん（左から3人目）家族
【左から】妻・淳子さん、父・真之助さん、修一さん、長男・雷斗さん、孫・碧之助ちゃん（10カ月）、長男嫁・志穂さん、孫・紅爾ちゃん（2歳）

親子3代　受け継ぐ思いを未来へ紡ぐ

真田りんご園 －中発知町－

池田地区の玉原山麓りんご団地で、3代続く木内修一さんが営む真田りんご園は、栽培を始めて約40年。おいしいリンゴを作ろうと、作付け面積を広げさまざまな品種栽培を手掛けてきた地道な努力の中には、どんなときも支え合う家族の絆がありました。

3㌶の栽培面積に、「ぐんま名月」や「おぜの紅」など県育成品種を中心に約50品種を栽培し、年間収穫量は約50㌧。木内さんは「リンゴ一筋に走り続けてきた。支えてくれる家族に感謝」と話します。

もともと農家で、父・真之助さんがコンニャクや米を栽培。国の転作事業や関越自動車道の開通に伴い、約40年前からリンゴを栽培し、販売を始めるようになりました。同時期には観光農園が増え、この地域に22軒のリンゴ団地が生まれました。

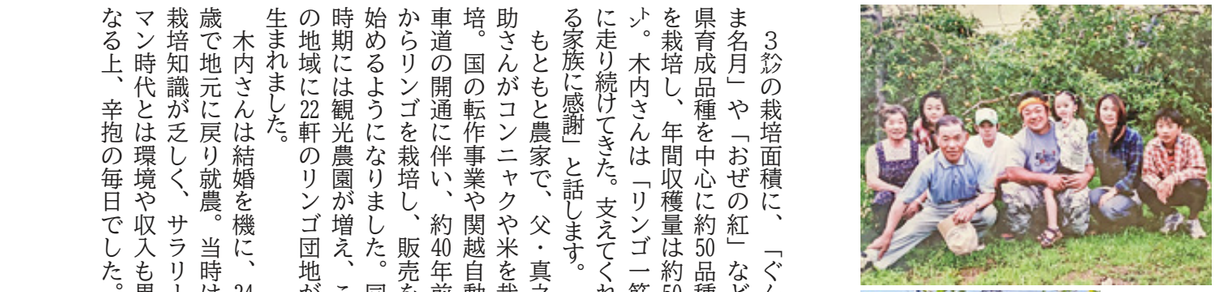
木内さんは結婚を機に、24歳で地元に戻り就農。当時は栽培知識が乏しく、サラリーマン時代とは環境や収入も異なる上、辛抱の毎日でした。

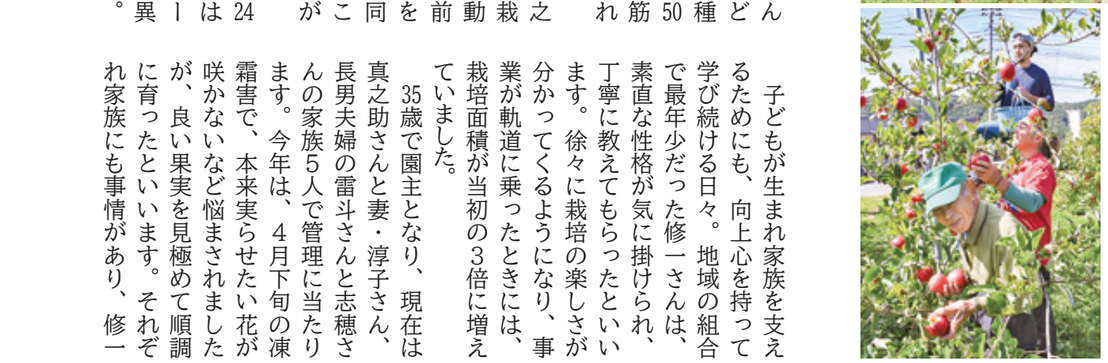
子どもが生まれ家族を支えるためにも、向上心を持って学び続ける日々。地域の組合で最年少だった修一さんは、素直な性格が気に掛けられ、丁寧に教えてもらったといいます。徐々に栽培の楽しさが分かってくるようになり、事業が軌道に乗ったときには、栽培面積が当初の3倍に増えていました。

35歳で園主となり、現在は真之助さんと妻・淳子さん、長男夫婦の雷斗さんと志穂さんの家族5人で管理に当たります。今年は、4月下旬の凍霜害で、本来実らせたい花が咲かないなど悩まされましたが、良い果実を見極めて順調に育ったといいます。それぞれ家族にも事情があり、修一さんは「誰かが体調を壊せばサポートし、助け合いながら進めてきた」と話します。

雷斗さんは4年前に就農。両親や祖父母を見て育ち、いずれは自分も携わるという思いが幼い頃からありました。積極的に地域の農家の取り組みを学び「同じ品種でも人によって育て方が違う。実際に試して合うものを模索している」と経験を積み、その姿を見守る真之助さんは「息子も孫も受け継いでくれてうれしい。ひ孫も生まれて幸せ」と笑顔をのぞかせます。

池田地区は昔から地域のつながりや学校との連携が強いのが特色。木内さんは池田中学校から依頼を受け、リンゴ栽培を体験する「リンゴ学習」を約15年前から授業の一環として担っています。生徒は花摘みから袋掛け、収穫までの一連の作業を体験。生徒が興味を持って熱心に取り組む姿に木内さんは笑顔を見せ、「この子たちが大人になったときに故郷を思い出し、地元のリンゴを多くの人に伝えていってもらいたい」と話し、「お客さんや地域に喜ばれているのも家族のおかげ」と感謝しています。





【写真上】開園案内のはがきに、毎年恒例の家族写真を送る。写真は2006年
【写真下】親子3代で収穫に当たる。「良いのができた」と実りに感謝

1.リンゴ学習で池田中学校1年生と記念写真。リンゴをかじる楽しいポーズで和やかな場に（中央・雷斗さん）2. 立派に育ったリンゴに感激 3・4. 丁寧に絵文字シールを貼り、収穫を待つ

楽しく体験 農家さんの努力実感

出雲唯人さん －池田中1年－

普段何気なくリンゴを食べていましたが、手間暇かけて育てる農家さんの努力やありがたさを実感できました。木内さん一家は皆明るく、難しい作業も丁寧に教えてくれるので、最後まで楽しむことができました。自分たちで作ったリンゴを、じっくり味わいたいと思います。

絵文字入りリンゴ 出来上がりが楽しみ

吉野穂花さん －池田中1年－

栽培の一連の流れを学ぶ中で印象に残っているのが、日光を利用してリンゴに文字や絵を入れる作業でした。上州真田氏の家紋「六文銭」や「寿」などのシールを切り抜き、一つ一つ丁寧にリンゴに貼りました。収穫時にはくっきりと浮かび上がるので楽しみです。

側果を生かした栽培 凍霜害を乗り越える

栗林りんご園　－利根町追貝－
利根果樹部会会長 栗林寛さん

利根町では4月中旬から下旬にかけて、特に追貝、平原、多那地域で降霜による被害がありました。

私の園では中心果（花の中心部で果実がなる部分）の8～9割が被害に遭ったため、その周りの側果を選別し、質を落とさないように栽培を続けました。収穫量は例年の半分程度で、リンゴの表面には「サビ」と呼ばれるざらつきが出ましたが、味や品質への影響はなく良いものができました。

異常気象のほかにも、利根町は鳥獣による被害が深刻です。IT技術の活用など行政と農家が連携し、動物を近寄らせない対策に取り組むことが求められます。また、この地域に関係を持つ人を外部から呼び込むなど、果樹の生産を通してまちづくりを進めなければならないと思います。